
FAIRY TAIL ～魔法と創造と竜～

サンダースター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL

～魔法と創造と竜～

【Nコード】

N7558Y

【作者名】

サンダースター

【あらすじ】

主人公・魔野^{まの}無龍^{むりゅう}はどこにでもいる普通の高校2年生だった。

彼は「FAIRY TAIL」が大好きで、新しいコミックスが出るとその日に買うほどのファンでもある。

ところが、ひょんなことから「FAIRY TAIL」の世界に迷い込んでしまう……

「FAIRY TAIL」のおなじみのキャラはもちろん、オリキヤラやオリジナルストーリーも！

魔野 無龍と「FAIRY TAIL」の仲間が織り成すバトルフ

アンタジー！

ブローグ

『今日からテストか・・・ねみい・・・』
俺は魔野^{まの}無龍^{むりゅう}。

どこにでもいるごく普通の高校2年生だ。

「無龍く早くしないと学校、遅れるよ。」

こいつは未導^{みでう}来夢^{らいむ}。

俺の幼馴染で、マガジンやジャンプなどを愛読している。

『おはよう。』

「おはよう！」

『昨日、テスト勉強したか？』

「うん、ばっちり！」

『そっぴや、今日FAIRY TAILの発売日だったけ

？』

「そっぴだよ。」

『やっべ、ちよつと先、学校行つててくれ！俺、本屋行つて

から行くわ。じゃ！』

「分かつた。」

く商店街 本屋く

『ふう。FAIRY TAIL最新刊ゲットしたぜ！』

そっぴや、何か忘れてるような・・・

『やっべー！あと10分で校門が閉まるー！』

俺は全速力で走つた。

「まもなく・・・時は満ちる。」

何だ？今の奴？時は満ちた、とか言つてたような・・・

というより、後5分？！急げ！

く学校 2年A組く

『ぎりぎりセーフ・・・』

「後10秒遅れてたら、大変な事になつてたね。」

「よし、全員座れー！これから、前期中間テストを始める。」

「3時間後」

「はあ、テスト終わった。」

「前期の中間テストとは思えないような内容だったね。」

「30分後」

「ふう、やっぱり1番自分の家は落ち着くな。そっぴゃ、今日買ったFAIRY TAIL最新刊読んで無かったな」

。読むか。」

「夕方 PM 6:30」

「飯も食ったし、風呂も入ったし、今日はもう見たいテレビも無いし・・・寝るか。」

「その夜」

ん、何か変な音がするな・・・

窓なんて、開けてないし・・・一体何だ

「！！！」

何だ？あれは？あんなもん家の前に無かったぞ。

（ピカッ）

うわ！

っ！！一体なんだったんだ？

また、明日もテストなんだし・・・寝るか

「朝」

「うーん、良く寝・・・え？」

この風景・・・どこかで・・・

まさか・・・ここは、ハルジオンの街！

という事は・・・ここはFAIRY TAILの世界？！！

一体何がどうなってんだ？

キャラ紹介

魔野 無龍 まの むりゅう 年齢17歳 使用魔法 鉄の造形魔法 アイアンメイク
雷竜の滅竜魔法 らいりゅう めつりゅうまほう ??? (現時点では不明)

備考

高校に通うごく普通の高校生だったが、夜に謎の光を見て、
寝て起きたら、「FAIRY

TAIL」

の世界にいた。基本的には来夢 らいむ と行動をとにする。
雷竜の滅竜魔法を主軸に戦う。
らいりゅう めつりゅうまほう

来夢 らいむ 年齢17歳 使用魔法 念導波 サイコネシス
未導 みでう 星霊魔法 ミスト せいれいまほう

備考

無龍と同じく、ごく普通の高校生だったが、「FAIRY
TAIL」の世界に迷い込む。

その経緯は不明。また、この世界の文字をある程度読める。
黄道十二門の鍵は持っていないが、銀河系9惑星という謎の
鍵を持つ
おうどうじゅうにもん

っている。現時点では天王星、土星、海王星の鍵を持つ。た
だし、1日1回しか使え

ないため、
サイコネシス
基本は念導波を中心に戦う。

第1話 出会い

ハルジオン 駅

「あ．．あの．．お客様．．．だ．．大丈夫ですか？」

「あい、いつもの事なので」

ん．．あれは．．ハッピー？

という事は．．今は第1話の初めの部分という事になる

な。

もう少し様子を見ておくか．．あれ？確か、このままだと．

．

「無理！．．もう二度と列車には乗らん．．．うぷ」

「情報が確かならこの街に火竜サラマンダーがいるハズだよ、行こ」

「ちょ．．．ちよつと休ませて．．」

「うんうん」

「あ」

「！」

「出発しちゃった」

「たゝすけ〜て〜」

やっぱり．．ここは助けたほうがいいかもな．．よし

「なあ、今、発車した電車の方向分かるか？」

「分かるよ、というよりあんた誰？」

「俺は、魔野無龍まのむらさぎだ。」

「おいら、ハッピー、よろしくね。」

「じゃ、急いで追いかけよう。」

「うん」

ハルジオン 街

ここはどこなんだろう？

あんまり、見たことない風景だし．．

あの娘に聞いてみよう

「あの〜」

「ん？何？」

「ここって、どこなんですか？」

「ここはハルジオンよ」

ハルジオン？！！

ということは・・・私、「FAIRYTAIL」の世界に
来ちゃったわけ？

まさか・・・この娘・・・

「ルーシイですか？」

「え？そうだけど・・・あんた誰？」

「あ、私、未導^{みどう}来夢^{らいむ}です。」

「よろしくね、来夢^{らいむ}。あたし・・・」

「ルーシイ・ハートフィリアですよね？」

「?!！何で知ってんの!？」

あれ・・・何で私・・・こんな事・・・言っただろう・・・

しかも、自然に・・・

「まあ、そんなことは置いといて」

「置くな！」

「しばらく、一諸にいない？私、この辺の事あまり知らない

し・・・」

「んゝ、まあいいわ。ただし!」

「ただし？」

「さっきのことは誰にも言わないでよ!」

「分かった。」

「じゃ、行きましょ。」

第2話 始まり

「ハルジオン まほうショップ
魔法店」

「えー!!? この街って魔法屋一軒しかないの?」

「ええ・・・元々、魔法より漁業が盛んな街ですからね。

街の者も魔法を使えるのは

いましてこの店もほぼ、旅の魔導士専門店ですわ」

「あーあ・・・無駄足だったかしらねえ」

「まあまあ、そんな事無いかもしれませんよ」

「まあまあそう言わずに見てってくださいな、新商品だってちゃんとそろってますよ」

「例えば?」

「女の子に人気なのは色替カラーズの魔法かな、その日の気分に合わせて・・

服の色をチェンジってね」

「持ってるし」

「あたしは門ゲートの鍵の強力なやつ探してるの」

「門ゲートかあめずらしいねえ」

「あ、白い子犬ホワイトドギー!!!」

「そんなのぜんぜん強力じゃないよ」

「いーのいーの、探してたんだあー」

「でも、門ゲートの鍵って、高いんじゃない?」

「いくら?」

「2万ジュエル」

「お・い・く・ら・か・し・ら?」

「だから2万ジュエル」

「本当はおいくらかしら? ステキなおじさま」

「北の駅」

「いたいた、ナツ」

『大丈夫か？』

「おー・・・ハッピー・・・ん？・・・お前誰だ？」

バタツ

「大丈夫、ナツ？」

『安心しろ、気を失ってるだけだ。』

「そう・・・ありがとう無龍^{むりゅう}。」

『じゃ、早くナツを列車からおろそう。でないと、このまま

気を失ったままだ。」

「だね。」

『それに、ハルジオンに用があるんだろ？』

「うん、火竜^{サラマンダー}を探してるんだ。」

『じゃ、俺も一諸^{いちしよ}に行くわ。いいだろ？』

「あい！人数は多いほうがいいしね。」

ピクッ

「あ、ナツ」

「やっと、列車から降りられた・・・つか、お前誰だ？」

『俺はM「無龍^{むりゅう}だよ。」

「そうか・・・ありがとな、無龍^{むりゅう}。オレはナツ・ドラグニルだ、

よろしくな！！」

『よろしくな、ナツ。』

「よし、行くぞハッピー！！」

「あい！」

ハルジオン 街中^{ジュエル}

「ちえっ、1000Jしかまけてくれなかったー、あたしの

色気は

1000J^{ジュエル}かーーーーっ！！！！」

「ものにやつあたりするのは良くないよ、ルーシイ。」

「でも、たった1000J^{ジュエル}よ！1・0・0・0・0・J^{ジュエル}！！」

「人によるんですよそんなの。」

「そんなのってあんたねえ・・・！？ なにかしら」

「さあ？」

「この街に有名な魔導士様が来てるんですって」

「サリマンダー火竜様よーっ」

「サリマンダー火竜！！？」

「そうみたいだね」

「あ・あの店じゃ買えない火の魔法を操るっていう・・・この街にいるの！？」

へえゝすごい人気ねえ、かつこいいのかしら」

「人気でかつこよくても、あんまり期待しないほうがいいんじゃない？」

まあ、こっちは正体がわかるからいいんだけどね・・・
大丈夫かな？

第3話 ナツとルーシィ

「ハルジオン 教会 横道」

「ナツ、大丈夫か？さつきから元気ないけど。」

「だつてよく、列車には2回も乗っちゃうし」

「ナツ乗り物弱いもんね」

「ハラは減ったし……」

「うちらお金ないもんね」

「確かに、それは元気なくなるわな……」

「なあハッピー^{サフランダー}火竜ってのはイグニールの事だよなあ」

「うん火の竜なんてイグニールしか思い当たらないよね」

「だよな」

「へえ、イグニールってナツにとって大事な人なんだね」

「やつと見つけた！ちよつと元気になってきたぞ！」

「あい」

「……」

「ホラ！！噂^{うわさ}をすればなんたらって！！」

「あい……」

「ハルジオン 教会前」

「（な……な……なに？このドキドキは……！？」

「ちよ……ちよつと……！）」

「ははつまいったな、これじゃ、歩けないよ」

「（あたしってばどうしちやったのよっ……！）」

「ルーシィ、ルーシィってば！」

「だめだ……反応しないよ……」

「あの男、確か“紅天^{プロミネンス}のボラ”だつたっけ？」

「確か、魅了^{チャーム}の指輪をどこかにつけてたよう……」

「あ！ボラがルーシィの方を見た！」

「（はうう……！！有名な魔導士だから？だからこんなにド

キドキするの!!?」

「イグニール!!イグニール!!」

「(これってもしかしてあたし・」

「イグニール!!!!」

第4話 謎の魔法（まほう）店（ショップ）（前書き）

やっと、主要キャラ出てきた・・・

第4話 謎の魔法（まほう）店（ショップ）

「！」

「誰だオマエ（汗）」

「！！！！」

サラマンダー

「火竜と言え、わかるかね？」

「はやつ」

「ちよつ、ナツ待ってよ」

「あれ？この声、どこかで・・・」

「「！」「」」

「来夢！？」
らいむむ

「無龍！？」
むりゅう

「お前、何でこんな所に？」

「無龍こそ、何でこんな所にいるわけ？」
むりゅう

「てか、場所を変えよう。動きづらくてしょうがない」

「うん。」

「無龍、どこに行くの？」
むりゅう

「あ、ハッピー！知り合いと会ったから、ちよつと向こうに行ってくる」

「あいさ、ナツにも伝えとくよ。」

「今の猫って、もしかしてハッピー？」

「そうだけど・・・細かい話は後！移動しよう。」

「なら、あのお店なんてどう？」

「あれ？ちよつと待てよ・・・この街に魔法店まほうショップは一軒しかないはず、

・・・まあとりあえず行くか・・・

「ハルジオン 教会前」

「ちよつとアンタ失礼じゃない？」

「お」

「そうよ！！火竜様はすっごい魔導士なのよ」
サラマンダー

「お」

「あやまりなさいよ」

「なんだオマエら」

「まあまあ、その辺にしておきたまえ、彼とて悪気があった訳じゃないんだからね」

「やさし〜」

「あ〜ん」

キュツ キュキュ キュツ

「僕のサインだ。友達に自慢じまんするといい。」

「キヤー」

「いいな〜」

「いらん」

「何なのよアンタ！！！」

「どっか行きなさい」

「うごっ」

「人違いだったね」

ハルジオン 謎の魔法店まほうしんこっ

「とりあえず、お前何で、ここにいるんだ？」

「えーと・・・確か何が、家の前であって、それが光って、気がついたら

ここに・・・」

『それって、もしかして、夜中の0時ごろか？！』

「え・・・うん。多分・・・」

『0時ごろに、家の前に謎の物体がいて、光を見て、この世界に来た・・・』

「何でだろう？」

ん？何か今、触れたような・・・

え？これ・・・

『100万ジュエル？！！』

「無龍^{むりゅう}、だめだよー、人のお金盗んじや〜」

「いやいや（汗）、盗むかよ、ポケットの中にあつたんだよ」
「とりあえず、ここで服とか使えそうな物を買おうよ」

「お前、つい数秒前まで盗んだお金って言って無かつたけ？」
「ねえ、これなんてどう？」

「っ！何だ？すごく邪悪な何かを感じるんだが・・・」
「とりあえず、振つとけば？無龍^{むりゅう}。」

「（なぜ、素振り感覚・・・）」
「早く、早く！！」

「ったく・・・」
持ったかんじ特に異常は・・・無いな

とりあえず、戻すか・・・
あれ？戻せない？・・・というより、手首になんか、ドク

口のマークが・・・
「それは、魔剣^{まけん}？レオパルド。それを持った者は死ぬまで

その剣を持たなければならない」
「あんた、一体誰だ？」

第5話 船上パーティ

「わしはアレク・デヴァー。ただの商人じゃ。」

『魔剣まけんを売っている奴が商人だ？』

笑わせんな、あからさまにおかしいだろ。

勝手にこんなマークいれやがって、ふざけんな！』

「悪かったな、こんなマークで。」

『っ！？剣がしゃべった？！』

「面白い。これ、買おう無龍むりゅう。」

「面白くないし、こんなもんK「おじいちゃん、いくら？」」

『人の話を聞け！』

「50万ジュエルJじゃ。」

「はい、どうぞ。」

『勝手に、払うな！』

「お譲ちゃん、この鍵かぎはいるかね？」

「なんですか？これ？」

「これは？銀河系9惑星かぎの鍵じゃ。」

うちには、天皇星、土星、海王星の3つしかないがの。」

「買います！いくらですか？」

「無料ただでやろう。」

「本当ですか！やりいゝ！」

（10分後）

『ずいぶんと、買ったな』

「残り、10万ジュエルJしかないよ。」

『じゃ、行くか。』

「またの来店を期待しておるぞ」

『二度と来るか！』

「・・・」

ブルブルブルブル

「ええ・・・分かりました。」

「ハルジオン　教会前」

「人違いだったね」

「君たちの熱い歓迎かんげいには感謝するけど・・・僕はこの先の港に

用があるんだ」

あー・・・なんかうざいのがいるなあ

「失礼するよ」

パチン

「！！！」

「夜は船上でパーティをやるよ、みんな参加してくれるよね」

「ねえ、無龍・・・」

『あ、気づいた？3週回って基本うざい奴だ。』

「なんだアイツは」

「本当いけすかないわよね」

ザッ

「さつきはありがとね」

「は？」

「？」

「ハルジオン　レストラン」

ぐばばばばー！！

「あんふぁいいひほがぶあ」

『「あんたいいひとだな」だと』

「うんうん」

「もう少し、静かにしなよ。」

「あはは・・・ナツとハッピーと無龍むりゅうだっけ？

わかったから、ゆっくり食べなっ

なんか飛んできてるから・・・

てかお色気代パーね・・・」

「ルーシィ、心の声でてる」

『というより、俺は静かだが?』

「にしても、あんたら知り合いだったのね」

「10年近く一諸だからね。」

「あの火竜サラマンダーって男、? 魅了チャーム っていう魔法を使ってたの。

この魔法は人々の心を術者引きつける魔法まほうなのね

何年か前に発売が禁止されてるんだけど・・・

あんな魔法まほうで女の子たちの気を引こうだなんて、やらしい

奴よね。

あたしはアンタたちが飛び込んできたおかげで魅了チャームが解けたって訳わけ」

「なぶぼ」

『「なるほど」だと』

「こー見えて一応、魔導士なんだー、あたし」

「ほぼお」

『「ほぼお」だと』

「まだギルドには入ってないんだけどね。」

あ、ギルドってのはね、魔導士まどうしたちの集まる組合で、魔導

士たちに仕事や情報を

仲介ちゆうかいしてくれる所なの。

魔導士まどうしってギルドで働かないと一人前って言えないものな

のよ」

「ふが・・・」

「でもね!!でもね!!」

『「強調きょうきょうしないでいいから」』

「ギルドってのは世界中にいっぱいあって、

やっぱ人気あるギルドは、それなりに入るのはキビしいら

しいのね。」

第5話 船上パーティ（後書き）

ルーシイの説明が長いので次話に続きは持ち越します

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7558y/>

FAIRY TAIL ～魔法と創造と竜～

2011年12月31日16時45分発行